

改正三河後風土記

三卷

三河後風土記

第 四

210

ナ

1-374



改正三河後風土記卷第七

目録

- 一 河戸合戦之事
- 一 諸將赤坂立陣 石田密書之事
- 一 中納言殿志願上田軍之事
- 一 西尾水留密書中野根八幡軍之事
- 一 石田柳力生擒博常之事
- 一 有馬松浦大村立所燭帆之事
- 一 金吾景門内通奉所植札之事



A210  
ナ  
1-37A

改正三河後風土記卷第三拾七

江戸辭会 卷之三

八月廿二日建田甲斐守長政田中三郎小幡  
 吉政最業佐清守三虎磨山守實元晴  
 戸川 肥後守守安中月大山城押の圍り  
 丸掛りし。昨夜大山の城兵去後明退き  
 よ。地々是は改年ノ事也。加らん  
 木曾川下の瀬を隔り江岸ハ殆ど盡く強固地  
 不業内也。黄昏直了。河く江岸よりく落  
 して見ると城の懸橋ハ早改破り穿り  
 八九ハ百詰小幡諸人直と塞死地ハ



人の海下一つも南無よりの山と見られて  
和寺寺知大垣一う援兵河内也道押か  
きうと少入きも是より川筋は法々く  
兵をを女後法のを切崩一切を致し  
尾一と黒田益道田川以下は法陣を川  
の境を下り河内城さして馬をむ石田  
法陣か陣之成ハ大垣。在て関東先ハ  
法陣法陣を攻めと少く時陣を陣  
幾法を因道して後法せん軍を出  
之成幾法は呂久川を又南河内を張り  
石田、先ハ新兵庫 杉江助多忠三十五兵

河内境陣を張る三根をつふりよ夜  
まや川を南も日をも預りけ霧降く  
咫尺も五分難業黒田田中出の法陣  
河内札のせといふ下より来てる川  
天は漲り容易馬と傷けいせ候也  
敵ハ此川を截させく戦ハ此方より戦て  
をらんしと法陣評法使一軍 知益崇言虎  
黒田。向く河内も前ハ天雲の光れ黒田衣  
をハ失敵の内後敵又とと互ハ彼ら  
海邊守中食ハ彼ハこひきり事と十者  
不ハ自前前を揚て招ふハ又と東津要



龍將並居きも床几の常は眺くも虎も  
うけぬ川向へ此一きも歎ハ大垣より  
後云と免きう此方より川を渡り一戦城  
屋(き)又歎は川を渡りせし戦はん其方  
いへぬと有又三浦荒布と事易し  
者先判り方の事渡りもよく取らぬの  
事渡りとも時よる又その事各所此流の  
大山城は夜中へ逃るは早の増攻も  
手若は此流をさしひ只今所を以て  
内府へ送らるも此水の一戦も若く  
りては各所此流をさしひ一戦川向へ

此水も此水川を渡りへきも幾定もな  
一此水川を渡りへきと思ふ定らも此水一り  
船は角と云くいへる處始龍將か  
感心は既回中を改派り川の津渡り  
きとあり此留の者ありし内は二部を  
云者河の水練人より強き者なりといふ  
さへは此水も二部をありし此水の  
心持河は津渡りを渡りしと云は彼者早  
乃川はハ津渡りも渡りしは津水も  
瀬渡りへき也と云ふ此の浦怒り川の津渡り  
下人へお魚の渡りし是水は津渡り白眼

竹を以て葛波一揆一介は味方へ弱と  
成るべきと一揆一揆退つてもいふもあはれ川に  
飛入りて其水乳の濁りて身をなして思  
うは浅瀬なりとて去ぬと後女三所島の  
鼻を以て川上兼重木原より一回は折返り  
是田長政殿一介は方城目とてく漆村の  
川上兼重の濁りて飛入りて其家へ是田三郎  
一介川下の方城海らぬと此川の先陣  
是田甲斐とてつり後女又と兼重は川上  
より海へ今日の先陣一介は是田家へ後女を  
つりつりて是田三郎は是田一介とて其後一介は

是田三郎を以て款を洗脱しとて折返り長政は  
河上町の西の方城を陣へ陣を以て  
杉江勲三郎長九郎忠村上理助是田小治の  
海へ折返り赤西十三郎是田一介の者を知り  
是田三郎は長政家へ神吉小物一番は是田  
討死に候とて是田三郎は自ら是田を振  
石田の折返り海へ折返りて実働して首を  
とて長政は是田三郎十六歳初陣とて  
款と候とて是田三郎は是田一介は石田の折返  
村上理助を馬より実働一介は是田三郎は  
是田一介は是田三郎は是田一介は是田三郎は

研く程ちよは家人 兼中忠之丞後為又在  
體に左介益田與物兼方中村林部は是の  
何れも苦戦して名せり田中を改の  
激語一々。市原の切と稲妻一苗字を  
扱事是より今後部原と名乗せしを  
回中、道乃川より後を道は黒田の跡  
より川下の方より流るる田中、家人宮川  
大牧、物兼、杉原、西村、月濃  
右馬先村、田助、惣之田、村、方、木、先、を、争ひ  
實を、兼、業、を、虎、川、下、り、流、り、て、流、る、る  
兼、三、原、杉、江、表、木、安、と、名、途、と、列、し、く

ト云一火死と教一と戦ふ事生約一正  
う川置安業山元信村、兼、兵、原、物、原、光、松、  
兼、三、原、吉、繼、木、押、繼、く、川、と、名、一、を、争、ひ、  
兼、三、原、是、城、見、く、先、に、川、端、ん、と、い、  
黒田田中、兼、業、以下、此、流、將、遠、回、り、道、を、  
長、改、水、源、く、城、へ、入、り、水、斗、の、立、札、と、り、  
尺、へ、者、と、家、へ、城、平、表、林、立、物、川、と、改、  
一、城、の、馬、を、替、く、事、一、む、立、札、の、自、力、  
馬、を、捕、り、後、者、と、改、り、馬、を、川、と、其、馬、を、  
系、て、除、り、り、道、有、者、り、石、田、の、侍、左、衛、尉、杉、江、  
助、多、木、は、其、昔、孫、系、一、流、の、家、人、と、い、く、



仁州城川の戦は高名たる武田の若  
輩の一決を恨幸ありとて浪人をしど  
石田道年托く随分会頭は同じきり  
勘多忠今日も九尺の朱搦の槍を搦く  
連なる勢を我実拂せしむるに  
回中の勢速にれく追廻く西村五郎  
濱り合皆戦ひしと勘多忠友の苦戦は  
破れ槍を投棄し其槍西村の額に  
中りしとて薄くもは終に勘多忠を  
突倒し吾の小姓松原吉房十八歳の  
初陣なりしとて走卒を其首をとる吉房

馬を馳せし五郎の御足見存せしと  
吾をかゝる五郎の心連甚だ先へ走り  
又追ふる前二つとと居鳴陣義法は  
呂久川かゝ陣を張く居たりし先は  
吾の槍を見て石田三成の陣を破れし  
先は勝利を失ふと是れは某徳と  
言ひ猶驕たる敵の横合より突烈に  
必定味方歩踏履ししとて送る三成は  
敵河戸を破る事成定く波平と  
後城にぬき是れ貴教某一回も朝勝濟  
少く敵と交戦せん事頗る率忽し

多き軍と反りてと、并兵庫、表  
九多忠信を従へて大垣へ入る。清原は  
論方暫く大垣へ歸る。墨田、藤堂、田中  
以下、活將は、呂久川に追討せしむ。智  
馬足と傳ふ。五、藤堂討死せしむ。一  
長政の家人、沖吉、小幡も、思の外、善し。一  
戸板、高橋、彌重、是、改、浪、浪、小物  
は、有、馬、湯、治、共、劉、平、金、た、り、と、  
石田の敗兵、呂久川の良宮田村へ、入、一、城  
藤堂、智、搜、索、せ、し、む、村、中、大、湊、助、以  
庄、角、山、田、五、三、東、罪、取、り、ゆ、を、謝、一、ゆ、く、も

勤中、一とい、付、後、業、主、藤、堂、改、其、者、を  
一、呂、久、川、の、湊、階、せ、し、む、川、を、治、一、南、城、の  
町、は、高、陣、兵、三、虎、主、番、を、採、兵、一、今、日、高  
せ、一、唐、冠、の、境、城、主、番、は、故、く、長、松、の、城、を  
守、り、一、武、光、武、敏、波、早、已、一、南、城、一、款、の  
大、軍、大、垣、へ、復、活、し、追、討、一、呂、久、川、を、こ、て  
押、入、り、來、り、し、ゆ、く、大、は、必、し、と、す、長、松、の  
城、を、捨、て、逃、れ、大、垣、城、も、余、亦、一、足、取、一  
智、州、の、業、名、は、部、主、氏、家、内、信、正、我、朝、に、  
居、費、り、す、其、夜、宇、喜、多、中、納、公、赤、家、氏、  
石、田、之、成、城、拓、き、岡、東、先、主、の、事、は、今、夜







秀家も論方以く夜討の沙汰は止まりり  
又江戸より此頃安後治部卿の船は度々して濃洲  
来りて今方合戦の機と早に帰府して  
申上りし  
神君の御旨に河内守長川  
より此頃討死し其敵の體は右方へ向く  
外きととと山守有るは大垣の方へ白ひ  
申上りて相八時方勝利せしと敵軍は  
りぬ多殊りて一に敗るる事也

流將赤坂立陣 石田密上る事

黒田田中・後崇忠の流將河内守長川と  
海ら款地へ三軍六町出で赤坂に居陣

申上りて六福崎池田清忠赤坂赤坂軍を  
攻取し流將も八月廿四日波軍衰り赤坂  
岩陣中一柳監物一人八武光武部捨違  
長松の城に大垣の子先より要害の地  
に遊ばし大垣より至るは一防軍へ  
味方を敵軍に大垣より向陣と流將は  
加勢にたす加勢は其作中丹後守関  
長門守も関東へ用事し一城を石河内守も  
大山城捨く大垣へ逃去し五六大山の押も  
不用と有馬治宗も同去事以山内將馬守  
中村彦左衛門も皆赤坂に居り

内府公事書翰 所ハ名山城山陣所ト  
ト定メ小高坂ト置服村ハ宮氣山  
ト黒田加藤家並豊臣服村ト細川 同村  
東大家ト福清又名山の麓ト井伊切多  
市後西牧田ト堀尾東ト有馬父子中村西  
池田兄弟陣ト此所是ナリ先ト菊池境  
戦捷哉井伊切多ナリ所ト一節ハ所感  
ナリト所宮我軍切の捷將ト是ハ所  
其文云

名分中入公切去共二本宮川尾戦  
ナリ戦以由ト殊聖日改年ト言お流

今方井伊三郎切捕切多ト移去備  
ト戦ハ尤勝ト其元何所ト名トお流  
至戦有指所要トお馬ト成柳家  
ト今ト忠告トお出ト口者ト右侍ト  
トお流ト

八月廿五日 家康

清洲侍臣  
吉田侍臣  
丹波侍臣  
清洲侍臣  
水原侍臣

吉田中助

田中三郎共備一柳監物徳永法平此田中  
山口文々々々又比田輝政  
浪を状共言江戸へ来者一々ハ許言と  
端

共二ツ一浪を此今共言年一別来者ハ  
其許川表在死ハ一及一、我  
收百人許見波草日押月ハ中誠心  
必能能成在ハ洋名と相後四右左右  
約入ハ之ハ海云

八月廿六日

家番

吉田中助

又波草共城の浪を廿七日江戸へ来者一  
ハ是ハ月是ハ日ハ中書とハ云

波草一風軍ハ三浪有如中物何九  
書中二雖中三浪中納云ハ中山道  
下押ハ中中ハ我未長計日押云ハ  
云舞ハ中ハ属当一ハ親ハ父子ハ何云ハ  
云々

八月廿七日

家番

吉田中助

同日輝政の合身備中ハ長去ハ賜印



所書

於今自甚表り先子列与正入精  
自身以子名子速波年と余親と事  
雖中其の中納言中山乃より上り他  
中其の我未ハ後世口書馬等ハ余を尊  
属也とのて地々

八月廿七日

家康

此田備中殿

河野清之助長政ハ去年の秋より替居  
上り此程に隔を越さし一は下  
さ向まハ其政事未とより波年ハ其博と

賀——幸何儀く序返言と進んさ

書未と彼乃ハ仍濃州表と女二親川  
及一戰討九敗千人盟と女二之と彼  
波年不泄一人討捕ハ其後と之と家  
東朝日下と書馬ハ中納言中山乃と其  
之と家と因るは是見刺入ハ今自余親  
瑞之等と其を而時と家朝と其比其  
其子福ハ之と為し海是りと致推量ハ其  
其後言と其のて地々

八月廿八日

家康

此田備中殿

長政八人自 中納言殿中山乃道後入  
侍其我仍整入等廿九日 堀尾信俊等一柳  
監物より并申表致切と只感有る申意と  
端より

今有浪州表合致之判其方家申

討九首浪をを波刃公寔以心秘

儀尤心も極中押令しは明日も

お馬朝を時いひて候て

八月廿九日

家康

堀尾信俊表

是より先志田安房も昌幸は決男たる候

幸村古より石田三成は諸君志田の家運同  
候名も申入と大に怪い山より甚き怪言  
伝之とも我々今川下下佐州上田一  
箱城の目も城廻り八月廿五日志田  
方へ浪を申すは三成より家康と志田へ  
送たり其文章は涼華虚飾と云と  
安事少く候のみ多しといへとも志田も  
是を怪い合致の心致致し候と云  
いひて候其文も云

去三日くは伏今六日刻玉作和山

糸原枝助云々





一 羽化茶屋之元母茶室老人等は  
以て其菩提として之儀は之今之追々  
以て清きも不中 則丹五部凡在茶の  
主人 数人 中 有る小も其形  
は之に人 数に増え古より之を二  
免悟る越後茶の之を越中へ引入  
之に之を此茶

一 丹後茶之儀は一平平均中茶勢は之を  
幽衣事 色に之に之を故一余  
流澤中其は甚是越中 破以法有流  
内府以若中 之有預檢之 採

一 此新茶の儀は根原は彼妻子大坂に  
有る可焼討之市也

一 先書の中は大坂西丸 内府留之店  
之者五百余店とて也 其は之は後傳  
城之西丸は後輝元は其は後傳  
各店に其の標本之儀は内府流其  
大將之八百余楯の之を中 後之類  
自心方を彼不致一人 此は城中  
御殿とて此分雜入 此流其掛火  
不致一字焼拂也

一 内府上府佐竹とて之儀は僅三万

人散を以て十五、播を以て廿、  
一、  
今、  
今、

内府、  
内府、

大坂、  
大坂、

内府、  
内府、

上野、  
上野、

一、  
一、

一、  
一、

一、  
一、

一、  
一、

一、  
一、

一、  
一、

一、  
一、





此書事ハ先日御見改りて其旨合當  
家中ニ著少くも御見許され父子共  
至事ニハ今有ハ九州訖不本形其預預  
此書公抛命之ヲ一併ニ釋元也  
因年ニハ公ニ讀之

八月廿

石田治部少輔

三威判

吉田安房少殿

杉ノ豆州ノ殿有之ハ公ニ志許ハ夜中  
お忍之御字ニ見末

安房少長子伴是之佐之ハ公ニ成之客書を

送之 内府を判教一ハ公を秀頼公ハ  
忠と致さ之ヲ公ハ佐之上所ニ父品事ニ  
佐州才幸村ニ甲州を秀頼公より下さ  
一ハ公ハ聖朝ノ城深巻一ハ公ハ佐之ハ  
未軍ノ勝負も及ハ公ハ甲佐上ニ公ハ  
宛リ之ハ公ハ御ハ石田ノ御謀也と可也  
知之返事もせさり一ハ公ハ

中納言殿真田上四城軍之書

其頃本多信俊書正佐ハ

中納言殿治部一ノ字郡宮内卿ニ至一ハ

神君ノ御一ハ公ハ石田上ノ方ハ御馬

有願  
中納言殿ハ本有治より此  
支度治月夜白るへ一と位毛くさ  
佐州上田一居備もさ上田安房さ方へ  
片皮とさるる消し未もさ日終くハ也  
是れもさ具せもさ一と位事之位  
宇都宮へ歸り甚中上事ハ中納言殿所  
と守り八月廿四日辰刻より宇都宮山馬  
河り之河也秀康御此也送り余治不  
以也治房も馬と並多人此甚治有く  
例もさ天皇亮也治もさ柳系成地一痛  
康政酒井有来也忠世回備治も忠利

回小五郎 忠勝也多兵衛も忠政也  
康重 大久保相摸守忠隣 回治也  
和子 坊後也正位也有也 忠政治房國持  
頼水 仙石職也秀之志田伊豆也信之  
日根地徳也部 吉重石川 吉重 以康長治  
牧曲右馬允康成 回新治也忠成以下三力  
八十七路舎共とさ少へ久回月廿八日上州  
松枝も弟也も此新もさ  
神君九月朔日早天に伊入治書島有へと  
也せもさ松枝より佐州小治も弟也も  
回國上田の地へ片皮もさ志田安房も口







何下さる呂幸又答りて八坂を岡原愈の旗  
秀頼公城に隠る内府公三の四味方  
せしむ事名甚心有之の事成敗一  
某に於てはたとひ婦子保身も後切らせられ  
尚城を攻らむとて君治の道いして大衆  
一降之志を翻さんや呂幸の策つ不意に  
天下隆世の定端に似せしむ一四道のたより  
尚城へ是人救向治の人幸八思名方より出  
いひ呂幸の返答余りて不承なり治は  
直上二回之地城踏破し一是ありて入る  
けりと治將軍派一吏を其時山伏の將軍

皆山伏の民家を捨若せし排原藤政  
見く志田六軍謀先徳の者今夜味方方小  
夜討とてあ人も知へし味方陣に突かす  
此のしむと治將軍陣を破り篝火夥數燈で  
白昼の如く見せせり左の佐幸村岡東留  
長運の号城包ひ夜討とてあんとお馬一  
つゝ味方の備為重きと成りて川邊に  
呂幸も是とすいさむ

徳川家のは甲州寺々々も八夜古の儀法  
さるる下と感心は九月六日早天より治城  
内お馬のし深屋平の者山伏馬とてく





押家より富くおと回付も思を賜き座置  
山の林中より野火困の声を發し地  
を打つ地乃徳先城搦し富くを侍  
天子是より降易し色めく不日豊勝と  
八十騎討し討くお平くを討し地城  
亦お六軍を散くを捕くを討し者  
散を知らぬ早父子お能く追陰く  
人救城川浦とひを散を捕く言砂を  
流し柳系原改築をく悟き志回ぬ  
人も助けぬ挙勅の原改築お不志を  
馬を畜し其習二十人左右あり

追を侍志回も言砂乃切くハ流し事  
叶は早く川返原牧野父子も柳系と  
回く志回を追を侍此時多頃原を獲  
し味万軍令を討し足若友柳  
之原川死原しとを侍し流野川  
川を討し柳系牧野も人救を  
師と免川返原又豊原忠七郎忠政ハ柳  
し白ひ家人朝日十物豊平は豊原先登  
是も働く外郭已日柳系とせし  
以獲ぬるしとあるは心願し川返原  
亦多頃原を討し今日牧野大久保源井



子の者軍令我討以軍を始め其爲  
最科怪ふはと下之く大久保の旗を以  
杉浦通はるし後切らせ其後之入田  
廿平 太田甚富部ホ七本陣ノ事ホ吾妻  
乃岩城守屋一と余せくる牧陣父も  
回く吾妻へ進出らば牧陣の物以古く勝切  
よと吾妻一は牧陣ハ我亦不知一た其  
家人 在力戦一たる之相以古く最下  
とと 仍て復ハ其旗を以懸揮却城ハ  
お奇さむととと 此後ハ只を夜城へ  
とと 遠巻一てそ日我送らる能九新てハ

上の方の合口也は成城んと評城控  
あり其時仿偽も正信ハ只お捨く其を  
て者も動らるるを々身ハ宗徳ノ人ハ正信  
計ハよこしてよろうハ(多)しと又中らも  
那 柳永麻段中とあらはら田代門西  
弟もハ大敵ハ四流は定り守人ハ原をり如  
急メ若敵ハ正信一守の事も然ハ  
を急取く上よと大敵より其取て  
ハ守人ハ正信門の西をとも守  
有へきやと中弟もは正信門を占めて  
此城攻の事よりう 柳永中上を以る





日根神徳吉印 右重詔訪同懐古頼水我  
家又強一（主）同月十日田表川拂宅  
少い切多豊後守康重後殿と勅書此  
時も亦多佐後守南道ハ勅書又直書れハ  
とく同道とへく十言詔訪も若りハ  
是より甲州へくりりちうはる常也りハ  
此下よりく詔を亦あり同ヶ原の事ハ我  
少石川内道を急ぐせりハ拂平康政二ハ  
佐藤もく少い金物一志西何程の事  
何んぢぢぢ付流敷して共城破破て  
くまへんもく亦とと康政一人ハ勢斗

本道初田津を押く急ぐ志田ハ教く

ゆもあきハ辭

西尾水勝遠最亦若根ハ橋守幸

英徳國掛叟誠之西尾豊後守光教  
父ハあそと佐光丹波ハ若後波多時ハ  
波友叔井我前守光佐ハ子也ハハ外祖  
母屋光秀ハ若ハ其ハ我徳西尾  
とハ稱せハ切ハ光教父佐光ハ譲信  
美濃ハ守護所後山掃利之ハ波友  
貴ハ我後ハ家ハハ後織田殿ハ仕ハ  
又豊后家ハ任ハぬハ二原ハ光教始ハ六とくハ底ハ





順家村を敵大に井伊重政本多忠勝等と  
見ゆ幸よ水腫亡は勝城も古陣せし  
事よしは西庵松下より加りて吾根の古壘  
と守りし今氏勝成ハ先より守る石と  
杞一城切を初らん云々是は

内府公以名陣より遠南分吾根へ来ても  
百足され先より守らるる事也といふ  
井伊重政其時内府も角も我ハ川沿  
しに壘と云也へ勝成ハ吾根村より  
西尾松下と回く是壘を以て一城地  
道合せし先一治津ハ水腫は是壘

經より挙動は若かりしと見ゆ津城  
捨て川返り吾根毛利宰相秀元甚東  
大氣痛政家長我部宮内少輔盛親  
安房守長光吾川守人廣家福崎治澤  
備後守三方助八守留より英嶽より吾根  
より大垣の西方南宮山と栗原山へ  
陣をとり吾外上方の法陣堅く大垣  
東より赤坂とは双方一雲斗滿て對陣  
因東方法陣ハ大垣の城より守る事と  
八月廿四より九月十まで同心陣守り  
守る事と大垣より守る事と此方より



大垣へ指さすも舞衣はんとしとて女中  
宣く光陰を送らう石田三成は大垣の中  
へ一居く控へしと斗雲我回一林守也と  
いふ家人とてとて汝ハ此也の者也見れ  
郷人先は知者ハ者ハ一郷人を活ハ  
曾根村の邊瀬古村ハ火をうけ焼亡其後  
西尾水種松下陣不踏動也一其耐  
城とて也一彼未成也掃一とといふ月  
廿物居うとてとて由五の浪ハ馬廻とて  
浪山を居るも田舎れとてとて之を信らハ  
赤坂の軍勢川田とて人ハ信を信古村

火を放んとせ一怨とて及智らも桂山とて田ハ  
川を渡りて城く彌我居る馬廻ハ曾根村  
左馬の家へ入一我ハ西尾友の也馬廻浪兵  
親族也といひ一也一西尾より控へる也  
也一及たり信く光教井伊也一許て馬廻  
とて其也と本音此ハ桑苗一大垣の火也  
とて札ハ書くも立たり又石田は福永也と  
言ハ一柳監物ハ守り也長松ハ城と  
焼せんといふ怪談人其也也也其も是智  
りも首を刎らる又赤坂とて赤坂



谷は言揚地理といふ浪士より此を八海と  
孫呉之法と收免器局操群の士之と  
善く少くも其言よく説論して聘と辱  
——味方と招く——と會は三年、唐衛系  
新の地理の同居と争ひ黄金百枚と持つ  
石田の祠と告——と地理首と據く我亦不  
是利と良海軍の頭より成り此地一  
作——試畝の中を耕して會は織て我  
若——此を凍は先年古岡殿下よりも  
礼と辱——と云ふ事も山田の  
懶人元より仕官の皇位より八祥退して

此代を誰も予備して今八齡素禱より  
ぬ出せの英華八求より是ら以て——黄金  
百枚投返して是座成出区——と當世  
軍将の言尚の臨治者と云ふ人甚感——  
くくとして承宣堂を啓記する格致又  
遠征は馬船の降は其先揚州海軍  
遠征の後流たり——と其降の父を都也  
盛敷ハ東下時より其家つぎ東家  
累代の不願兵使郡上郡山田の云哉  
傳小登陸の時より到り右衛門傳願の地を  
奪はる當國小系より後任其不願ハ七千

五右衛門とそせへ〜今一孔あり八  
濃州乃流八直へて波軍中納を獲下を居  
〜しゝの事故、素任にう大山の加勢よ  
てらあ合せ〜と、紫隆思、年方〜  
其命よ、世にささる、法入、此懲り、為  
宣氣を、謀ん、毎〜と有〜と、免前、さ  
る、國東、山先、清剛、へ、弟、陣、方、は、波軍  
〜、法、方、の、さ、の、軍、波、の、勢、を、さ、さ  
復、及、其、信、よ、さ、さ、の、柳、系、帝、政、の、う、紫、隆  
多、國、東、の、山、味、方、よ、さ、さ、〜、と、を、め、れ、れ、と  
紫、隆、大、の、信、く、信、の、信、と、以、く、一、致、よ、

川、多、く、多く、其、款、の、中、は、さ、く、國、東、山、味、方  
乃、色、を、取、先、巡、果、代、付、願、也、と、郡、上、親  
下、治、く、申、了、八、幡、の、博、政、丸、へ、さ、中、合、衆  
は、京、よ、つ、て、國、東、へ、中、上、守、衛  
神、君、造、意、の、一、筋、の、山、味、方、直、へ、さ、さ、中、上、親  
は、中、上、親、方、く、中、領、安、堵、乃、以、教、書、致、也、一  
下、さ、〜

五、濃、山、郡、上、親、今、直、の、忠、節、一、筋  
直、の、忠、節、今、直、の、忠、節、一、筋、法、平  
一、筋、中、上、親、方、く、中、領、安、堵、乃、以、教、書、致、也、一  
下、さ、〜

八月廿。 家藏







貞通、次男隆理之角通、存家、光福、兼吉、依  
五右衛門、斗山、古橋、と勃、よ、あ、ま、ま、と  
防、御、十、五、城、山、実、八、五、山、と、云、如、此、り、今、喪、り  
先、の、細、道、を、魚、の、口、く、貫、く、龍、入、改、し、り  
是、を、治、く、と、城、中、村、部、に、是、の、地、を、実  
外、一、帯、の、地、を、一、帯、の、地、を、十、五、人  
將、奉、倒、し、り、告、底、へ、捕、ら、ひ、是、も、八、中、村、も  
十、五、人、の、身、も、或、ハ、岩、石、に、身、城、中、村、も  
或、ハ、持、ち、て、刀、槍、を、舞、う、も、死、者、も、一、帯、を、懸、  
け、も、城、を、築、治、奉、重、の、那、波、に、是、の、今、を  
惜、り、以、防、り、も、と、今、在、野、終、り、古、城、也

と、改、更、し、り、柵、を、破、り、八、幡、の、旗、を、城、中  
に、交、を、為、進、と、名、地、を、花、一、帯、を、治、く、左  
穿、も、十、五、人、討、死、ん、法、不、先、也、一、帯、を、  
と、傳、へ、改、口、を、退、し、り、む、の、如、版、沼、酒、屋、の  
旗、に、踏、踏、へ、城、中、の、旗、一、帯、を、奪、く  
降、り、此、日、を、名、ハ、大、女、へ、押、寄、り、り、谷、口  
橋、頭、に、陣、を、置、へ、り、城、中、へ、彼、を、送、り、て  
降、り、城、を、明、後、さん、は、城、中、男、女、悉、く  
一、帯、を、物、く、り、と、中、也、以、城、中、一、帯、は  
り、さ、と、治、り、何、を、明、後、の、旗、一、帯、と、送、り、  
明、刺、を、降、り、り、と、右、系、危、貞、り、通、

壬子年六典通居城を款圍むと云々  
大山より遠信の爲據之據を九月二日亥刻  
郡上より二里川安村近高澤の人家より  
弟より関東より内色より事々々々八遠信と  
早速口和睡を二一と幼一と右宗と凡  
込父一歩以直勇成初む睡覺さうとも  
眼氣より款と其信和睡を活あきや  
遠信西尾全取出の一遠信もを據ふまで  
遠信も角も直一と聖二日候天下真通  
父子赤谷馬成を直を直西尾初も直  
福系、遠信廿人と思設せ凡八侍連々

戦と文一、福系も痛く強々々を爲す  
自の者多く討手三河三河川邊に福系  
父子代、誰廿の城へ一と事々を烈く治く  
也、遠信全取出候一と事々を烈く治く  
送り候々、関東内色廿々々上段、二、三、  
全取廿人事々々廿廿、早に城と内色廿  
一と事一、八、九、通我出候々、関東  
内色の方乃志廿々一と事々各居城攻め  
由、上事と切凡遠信一と戦一、凡  
但一城と内色廿廿、内色  
内府公弟と一、内色廿、文、近、六、廿一、



人雙面碧一和膳正一と云者も八部也。  
回之々一々人雙八重着清水之軍也。其  
在着八ヶ名と 中納言、上以傍乃以傍一  
河を一々八ヶ名と云々

元札之旨披見申上之云々仍令費  
西尾にお給去朝。郡上よりお給編系  
右系急居備八幡城の山前外部  
急押被敷敷多の討丸甚上程、  
懸望し、有人雙の流丸より上力子  
之流丸治是又お供より他山に極之  
比類の流又、お義信在り付り力上居

佐州に流流延若陣の衆控於甚表  
中流のくは

九月十三日

秀忠

在着の物

関ヶ原一戦終り、若くは  
神君福系と相通せしと、味方より、在己の  
居陣政なりき、是れ、甲斐也。  
是れ、相通り、奉勤、お神妙、之、去、也、  
郡上乃地、是着、の、順、已、は、安、政、の、最、吉  
揚、り、は、貞、直、通、り、は、列、は、本、願、場、  
と、と、豊、後、の、印、件、乃、此、は、加、恩、の、地、也











以謂是史下りハ味方中 杞ノミキ紳  
以ハ又

一 輝元が馬ノミキ幸 摺ノ体ハ切ト  
存ハ 家康石上ノハノ入 幸ノト存  
以時トモリノ者付成モ不爲立  
中 夏ノ以事

一 輝元、中ノ入 全帳出城トモ成成時  
物モハ初ハ似合ニハノ内ニ又付中  
人ニモ求メルハ氣ノ氣ノ通過トモ成  
物モ付成ニ摺ノトモ成ルモ其詳モ  
以心傳ル事

從江州ヲ暫流クモ氣ノ自存不爲ト  
以ノトト氣是ノミキ懇ニ輝元ヲ切馬  
幸ノハノ切和山ノ中 西元中ノ人  
以ノミハ成所要ノ以ハ是ノ氣前勢州  
ナリ 勢前陣ノハ 大垣 佐和山ノ通路  
攝ノハ 自存ノ時ハ 右田英助此ハ  
細道ト江州ハ 以成リノ成リト  
おもハノハ長川ノ下ト存事

一 備前中納言 人ノ自存ノ事 備前トモハ  
以ノハ物ニモ成 勢前ノハ切 自存ノ口  
トおもハノハ不及ノハ一命ト捨ル事

今其分列思好之有し羽是  
少珍回米之事

一 尚分只成收乃てて人質多女子  
宮崎之界一て有ていふ分列にて  
るは事

一 今分留州より傷は而西内羽馳流  
長大安室一子と川池流あるりる

大人救はる西内人救少、ソソと  
て居成体こと事

一 丹後、成疎明り他か事外中と  
りる彼表らる而表表りる居て居る

ふし好て

九月十三

石田治邦の痛

堀田吉房殿

之成、け言中、あはれ東安室は、羽馳入  
る、知向軍減進緩、味方の心中  
沙弥、皆といふ所如、一、道理あり、ん如  
切しとせは、猶も子孫子といふ所、投死地  
後生、の意と知、只根と、大軍を戦、危を  
願、あ、一、甚切と知、此事を増、はと物  
一、ま、人、は、是と、識り、しと、と、様

有馬松浦大村の略陣帳之事

其頃肥前守有馬城之有馬修理亮晴規  
因平戸城之松浦肥前守德佐入道  
或却以法平因守大村輝之太村丹後守喜茶  
因守五郎孫次郎吉龍晴以下八軍一及  
大坂の吉の申より千米程の山原喜茶の  
大矢松重の太田源重の吉使者として今  
毛利中納言定長多中納言の西は長石田  
治部少輔摺田重の尉大谷利輝の摺長兼  
大谷大輔吉の尉として秀頼公の御前  
上は中納言と謀一人を東西義公と譽  
りしより定長多中納言石田大谷長兼と法然

軍勢城門具一東小の敵向  
内府幸頃驕敵の羅城追討一其一族  
侵軍悉滅數せしむると以治之城内  
室中納言の法軍勢各著成守り今  
魚一々池と各も義公の御前  
大坂（宗長之）と秀頼公と交わりと  
中納言は有馬松浦大村の吟九洲の彼  
島細八郎の吟とも秀頼公の御前  
道省直（才）と姓はとも各軍勢の御  
云記儀一々順地一々定長一長門守  
下乃國近忠昭一室一入は云集一





物は、一先順地へ之帰る世の有様と  
 足定の免も角も汁ふへ」とあはれし各  
 一回へ十八回より船と漕船へ已む  
 順地へ之帰る世の中も大村丹後も八肥後  
 然本へ使と之く加後も舟は清心へ此旨  
 中送り因東の口東方又余んと隙へ食  
 此時然西へ加後清心黒田も水のみハ  
 皆石田の宛意へ一六信正時信をもとせり  
 大は信へ大村の事成因東へ中上へ一六  
 神君も所感候へは所言成候へは  
 さふ大藏紀安民記  
尾藤

今吾黄門内想行奉り望納事

今吾中納言秀秋八世也八城と改幕して  
 後中納言中納言秀家よりさむはも秀隆へ  
 後白世もさむは秀家秀秋へ中納言  
 貴殿は毛利宰相秀元長末大前橋と  
 回く信誓始へり史より濃州へ糸澤  
 是へりとの事切り一秀秋思ふ事あり  
 若れは我出度頃日若るも軍役勤難  
 誓保費と知へ糸澤直へり一今江州  
 二宮へ川返一戦口と送り吾れは秀秋  
 其始古岡改幕とて若るも世もさ

幸女へ信教と中睦——石田三成  
信教は婿と秀秋の事 右衛門(初)  
津と隆——右衛門怒り息は秀秋、  
可願花衣一玉収めせしは瓶茶少名は終  
僅に十言石を授らるる時

神右衛門秋置は津に沈まき——地  
傷りし程に右衛門信をうせらるる——月  
越下り止事我憎す左紀に  
徳川秋信らも人も其少少いふ句は  
魚——ととと瓶茶を返——のふ友に  
お力く改不恨は事——右方其ふは秀特

此芳恩何の時より報——しあはるる折こそ  
あふぬと思ふは三成の月然源くそ有る  
とある其上是田水ハ秀秋家元平君石見  
頼勝と月縁考と也水の家元丹之左衛門  
光ハ秀秋の家人——川村瓶茶と云  
秀水ハ秀秋の契之河原ハ秀秋の父  
大坂の信隆の魚——瓶茶を也馬せし  
頭中津より彼と少君——送り石見の方へ能  
中絶之處と諫く関東の味方と是——と  
徐君も石見回復頼系信成におはせ——家人  
神木信之丞と其前其前(宮家)を関東へ



ト一秀秋保方より長岡原田甲斐を  
長政より奪く事一ありは

沖原も長政を以て秀秋の志は統若  
々々保方より相こそ徳川城攻の時と

秀秋の徳川城へ老一城へ入て加勢  
せんと申入る事一と長岡原田内家長

男同是世よりハ止支と相成る事一と  
いへとも其後も徳川を固東へ入る事一と

長岡原田を以て秀秋大坂の徳川止難  
徳川の攻めと相成る事一と

内府御馬におわくハ保方より京へ合戦

ハ保方一重切直へき徳川一長岡原田

志未だハ保方一思ふ事ハ長岡原田人衆  
我百部一たり守長多中納言長岡原田

乃心中一なり難一と思ハ大坂一と  
石田とお説一戸田武英も平塚園場

と徳川一秀秋の言宮の陣所は徳川  
秀家之威軍威ありハ早く来らる事一

中送りハ若葉の陣一きと相成ハ其後  
岩敷より一長岡原田一と相成りて

討ちとも忠義は、保方も残り恩義は、  
子孫一及ハ一秀秋も一ハ保方より

女使徳々余白せん日らりや對面せぬ  
事はなほ満々り是月指へくあるを  
達ししと今も是月分田も平塚も  
ゆるやゆるへき新軒、秦王と柳へり、  
本意と直せさう、やき未練の備は  
仕敷くはと返言、每人、この宮小立り秀家  
之成の口と中匠きり、秀秋、道日、病候  
ふ、はと對面せぬ其と道日と書りて  
每人、徳々此不道東らうと上、病をつとめ  
道日、大垣へ余陣、秀家に三成へ面談せ  
しと有差、八田平塚も理方れ、疎急な

大垣へ空く三傳、秀秋付口五日、  
大垣、山々岩陣、吾々城中へ、中、送き、  
秀家より城の西松尾山の標へ陣を  
遣ふ、と中、送、秀秋必なりと、日動  
八千金、と、川、具、松尾山の上一陣  
せ、大谷刑部少輔、無、と、秀秋と  
道日、松尾の陣、一、余り對面  
中、若、月、陣、事、其、其、に、故、右、同  
跡、更、山、電、と、深、く、思、案、並、り、故、言、宿  
大、福、を、故、中、福、へ、事、其、其、に、中、近、八、八  
と、秀、頼、公、を、補、佐、其、其、と、天、下、と、も

治りしは身を固東へ腰を曲ぐ河波  
——かゝるも理也——守森多岐とてうめ  
石田長来未のきり大始うにの忠中を  
疑ひしとも免る用出縁と云ふ思と云切考  
以忠志よも有佛——と云ふ思——も思茶  
ありて返還二心せると云ふ、ふ思只く天下  
太平の由をも思ふなり——と陳せあり  
其時平忠存ん裕来佐治のあり大忠  
白ひゆりゆく黄門事は切雅うを聞候  
少忠思よとて只く斯言官大縁の思ふも  
切しきも思ふ八切君よ五心抱しきとて思ふ

以りしは先頭より不答りてと陳せし  
ありとも、彼是しとて雅治より書懸しとて  
黄門万一兩軍存有とて思ひ、衆多に  
もりしは其感出氣をなへしといへば  
去隆中絶之敵ハ其其又と師——とせとも  
は年若者も月万一口軍忽の口筆動も  
以りきりと我、自老ゆ其方大縁重の  
必中ゆりも大忠安候ゆ、此うへ  
能く流く口筆忽たふん師沙活も思  
とて候りあり大徳——ては秀家之成ふ  
免角秀秋心中、凡書は是は時上宮壽



と云く 吾志を省ん事 肝要也と云くと  
東漢一少帝の属臣と望望と云く 河川  
豊満も矣 田甘を食を使と 松尾山の  
陣下り 送る

- 一 秀頼公十五歳と云く 城山八国白嶽并  
天下之政替 秀秋卿と下濠治事
- 一 秀秋卿と云く 方为財播 慶里之臣
- 一 抗好抗茶 八七茶と云く
- 一 於江州 十万石福系 佐治 回 十万石平家  
石見と 秀頼公と云く 天下と云く
- 一 為苗度と云く 山吉物 今云く 三石收 福系

仙傳の曰言 枚平家石見の事

九月

孫傳  
安玉与  
刑部補  
治部補  
大藏卿  
秀家

菟葉中絶之敬

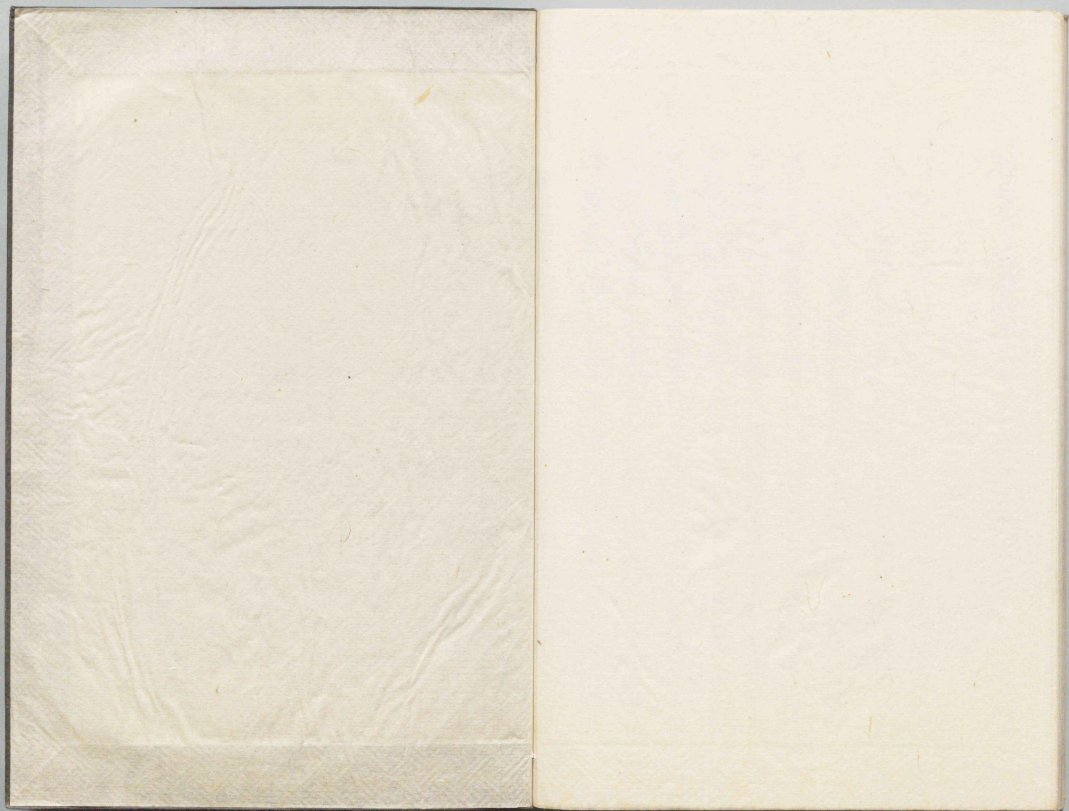
秀秋是也 拙見也 是也 後滝川 秀西 對面  
是也 秀家は也 始吉河 中云く 事 秋也  
配法乃 常言 文と云く 始新 秀秋元と云く

秀頼の心保方して文は善心思ひもよふ以  
ゆゑ利権を以て心感動するんとす衆の  
属託願を我共よとの所是は保も毛我  
等々府を求ると云へし秀頼万一も善心  
あふんは保細の属託は善心我身へも  
守中の保界を夏せんや是は小児を欺くは  
云との中一天下の政勢を秀頼は湛らん  
とて代り其を己は輝元はと西元へ居るに  
天下の政勢我より先んかたふん輝元は  
いらぬと云ふる輝元はと追ふるし秀頼は  
後れ事叶ふべきは所よりの衰返は其

政勢我弱きとも又紫冠の榮權をとたのむ  
べき若たもあんなは輝元は我と又政勢  
の事起り天下再乱の基たすし秀頼は直  
お陣して初君の敵を更んては成すは保  
直へし時分能秀頼に始すは元へしさ  
一と盟書は其保返さるるは南徳  
向日やうと云ふる秀頼は成すは秀頼の  
心中我弱く其善心は始りたり

大政記  
巻第

改正三巻第之三拾七段





愛知県



1103264740